

Freedom for Shirosaki!

城崎勉さんに自由を！即時の釈放を！

城崎勉さんは2018年9月26日に東京高裁で控訴が棄却され、懲役12年の判決が確定し、11月26日に府中刑務所へ収監されました。

府中刑務所は、超法規的措置でアラブへ出国する前にいたところです。未決勾留日数などを引かれ、出所は2027年11月末の予定になります。

城崎勉さんを救援する会

USのムシヨ

府中刑務所在監 城崎 勉

9月初旬に懲罰へと引っぱられてしまいました。いやーまいったなと思いつつ、それでも何とかなるだろうという気分だったので。というのも、ほぼ5年前にヤズー・シテイFCI(L・低)で、とある事情で罰房(あちらではHole・穴蔵と呼んでいました)へと引っぱられ、そこで丸1ヶ月を過ごしたのですが、その時の体験から類推したのです。が、我が類推は全く甘かったというわけです。

1. USのムシヨ(等)との違い

(a) USのHole(穴蔵)との違い

USのHoleでは歯ブラシ及びチューブ、シャンプー、リンスをくれる。他の一般房と同様に上下二段ベッドの二人房(但しSuper Maxといわれるのと、死刑囚房は一人房)、シャワーは房内についておりその使用は自由。紙片(封筒)2枚、便箋2枚とふにやふにやで短いボールペンをくれる。USではZIPと呼ばれる郵便番号が必要なので、私は基本的に倭国向けに書いていた。運動は毎日つまり土日祭関係なく1時間+a、連日新入りがあるので、看守(あちらではCorrectional Officer)は(雨だとか用便だとかで途中で戻りた)いと云っても受け付けないぞと警告してた。又、この国では一

あり、これが最初に書いたように甘い考えたことを認識せざるをえなかった。付け加えるならUSでのHoleは釈放になる少し前だったことに比して、倭国でのそれはムシヨ送りになって余り時間の経たない時期であった。これは私にとっては良い経験となったと云わざるをえません。

(b) 処遇・人権に関すること

多分7月だったと思うが、食卓(座席指定されている)のBack Support(とあちらではそう呼んでたし、こちらでは腰部コルセットと呼ぶ)を示して、(US連邦刑では医師がその必要ありと認めればタダでくれるし、2年毎に新しいのに換えてくれる。2年も使っていればそれなりに傷むからだ)と云った。たまたま東拘で購入したのを使用している囚友がいて、(うむ、これはしっかりしているな。幾らって云ったっけ?)と聞いてきたので、「ただだよ」と答えた。私も東拘でその手の「コルセット」を買わされたが、それは現在の償与金と等しい額だった。云ってみれば寅さんの腹巻きと似たものだったが、それでもないよりは少しはマシだった。他方、USでくれたのはプラスチックの支柱板が入っており、まさにしっかりしている。最初にもらったのはその支柱は金属で、あそこのムシヨでは所によつて通らねばならないメタルディテクター、そう空港などに設置されているあれのところではそれを脱がねばならなかったのだが、新しい物になったところでメタルからプラスチックに替わったためにそのまま通過できるようになった。その変化を知らなかった私はそれまで同様腰から外してたのだが、ある時やはりBack Supportを用いている囚友がもうその必要はないことを教えてくれた。ともあれBack Supportは2年毎に新しいのをくれた。

日中一ヶ所に坐っていることが強要されたが、USではベッドに横になっていても問題はなかったし、手紙を書いてもOK。勿論(c) Radio、TVはなかったが、Radio及びバッテリーは購入できた。購入は週一回で品数は限定されたが、購入依頼をすれば翌日には購買が配布してくれた。この国では月半ばに受付けて配布は翌月の末とまったく人をバカにした対応とは大違い。

あつ、そうそう、我々プリズナーは顔写真入りのIDカードの所持を義務付けられており、そのカードを特定の器械に差し込むと所有額が示される。だから、仮に1\$以下しか持っていないのにRadio(約50\$相当)とか申し込んでも即却下される。私は基本的に切手と便箋を買っていた。又、罰中であっても官本(1冊だったか?)を読めた。勿論、同房者と交換も可。

運動場は周囲を壁に囲われ、金網の仕切りで仕切られた所。罰房内で隣りと通話出来ただけでなく、運動場では隣りの仕切りの者はおろか二つ、三つの仕切りを挟んだ者との会話(ドナリ合)も可。私が入られていたヤズーL又はヤズー低では電気が大規模にショートしたため、FCI(中)へと運ばれたのだが、そこではエアコンが効いていてむしろ(低)に居るよりも良い環境だった。それはともかく罰中に囚友と話せ、手紙を書けたことが大きかった。そうした環境が倭国のムシヨでも変わらんというのが私の頭の隅に

余談だが、私が最初に入れられたのはポーマンの刑務所(高)で、そこでは至る所にメタルディテクターがあったのだが、困ったのは安全靴。先っぽに金属のプロテクターが入っており、いちいち脱がないと「ピー」と鳴ってしまう。これもミレニウムから大分経ってプラスチック製になって脱ぐ必要がなくなった。それなのになぜBack Supportの支柱板が大幅に遅れたのかと私には不思議だった。

2年毎ということではメガネについても触れねばならない。私は近眼、乱視、老眼を有しており、今は珍しくなくなりつつある近視を基調にして老眼用のがはめ込まれた形の遠近両用メガネを用いているが、これも2年毎に更新してくれる。云うまでもなく眼の度数は年々変化していくし、乱視もまた変化するもので、2年毎はリーズナブル。勿論、連邦刑ではこれもただ、かつ、その都度検眼結果をくれるので、不格好なただの眼鏡ではなく、外の家族又は知人に格好の良い物を作ってもらうことも可。倭国のムシヨでは一応検眼し眼鏡を作ってくれるらしいが、検眼結果は教えないので外注は不可だし、眼鏡代も要求されるという。それもあつてか、ある囚友は「捕まった時にメガネを壊されたので、弁護士に云って百均で買ったのからった」と云っていた。私はへえーそんなものも百均で買えるのかとビックリしたが、それ以上に法無省の人権無視にあきれた。

(c) 償与金

云うまでもなく償与金ははずめの涙だが、これとて基本的に私には使えない。というのもそれは計算上の額であり、出獄時に渡すという仕組み。勿論、これは利子などつかない。つまり物価は上がる一方だけど、これでは年々目減りするし獄死すればそれらは霧消するというのだからあきれる。対してUSでは償与金は月々の収入

として計算されるので、みんなはそれをどう使うかを考えている。そう確か十年ほど前だがUSでは物価上昇のため金の価値が十年で4分の3以下になったという記事があった。現在ジャンプブローは貿易戦争をしかけているので物価は上がる一方、その下僕のアホは爆買いでジャンプブローを支えているが、そのツケは洗脳された庶民。お先真っ暗でんな、この国は。

(d) 手錠問題

『紙の爆弾』10月号に救援連絡センター代表の足立昌勝関東学院大名誉教授が裁判所での手錠問題について書いているが、これはUSの陪審法廷ではありえないこと。といっても陪審法廷が開かれている間でのことで、予審時などでは基本的に各々が収容されている郡拘留所の半袖ジャンプスーツで出廷する。ジャンプスーツというのはつなぎのことですが、それぞれの拘留所によって色などに違いがあるし、中には昔懐かしい綿々シャツ・ズボンというのもありました。それはともかく地下の仮監から出されると廷吏に付き添われて各法廷裏の控え室（これは金網づくり）へ入れられ、その後でここに出廷準備、つまり出廷用のYシャツ、ネクタイ、スーツ上下及びそれ用の靴に着替える。一見するとまるで市井の人。しかし、これが通用するのは出廷がごく短い人の場合で、出廷が長引く者は陪審の目には獄中者と判る。というのは、いつも同じシャツ、ネクタイ、スーツ上下だからで、加えて私の場合にはなんと4週間にも亘ったので髪も伸びてくるので、形式的なスーツ姿も台なしだなど思ったものです。

ついでに云うと、法廷裏の金網控え室は陪審からは見えないのだが、傍聴に来てた人には見えたという。それは、通常は法廷通訳に

あたった人達も「初めてだワ」と云いながら、その場所へと入ってきたが、その時に金網の檻が見えたとか。通常は法廷内で通訳にあたるのだけど、裁判長からの陪審向けの訓辞は「後でやって欲しい」という要請があつて、それに従ったからである。尚この控え室は隣りの法廷と共用なので、そこで待っていた囚友がめずらしい日系の女性が二人もやってきたというので、その二人をじっくり見ようとはかりに必要もないのに用便に立つ形で近くへと接近。ジョボジョボとやった後ジャーと水を流したのでその大きさに女性達がびっくりというおまけもありました。

ともあれ、あちらでは一応陪審向けに手錠やジャンプスーツは見せない配慮をしているということ。それは被告がどこから法廷に現れるかを陪審には知らせないような配慮にも示されている。(略図の注解参照)

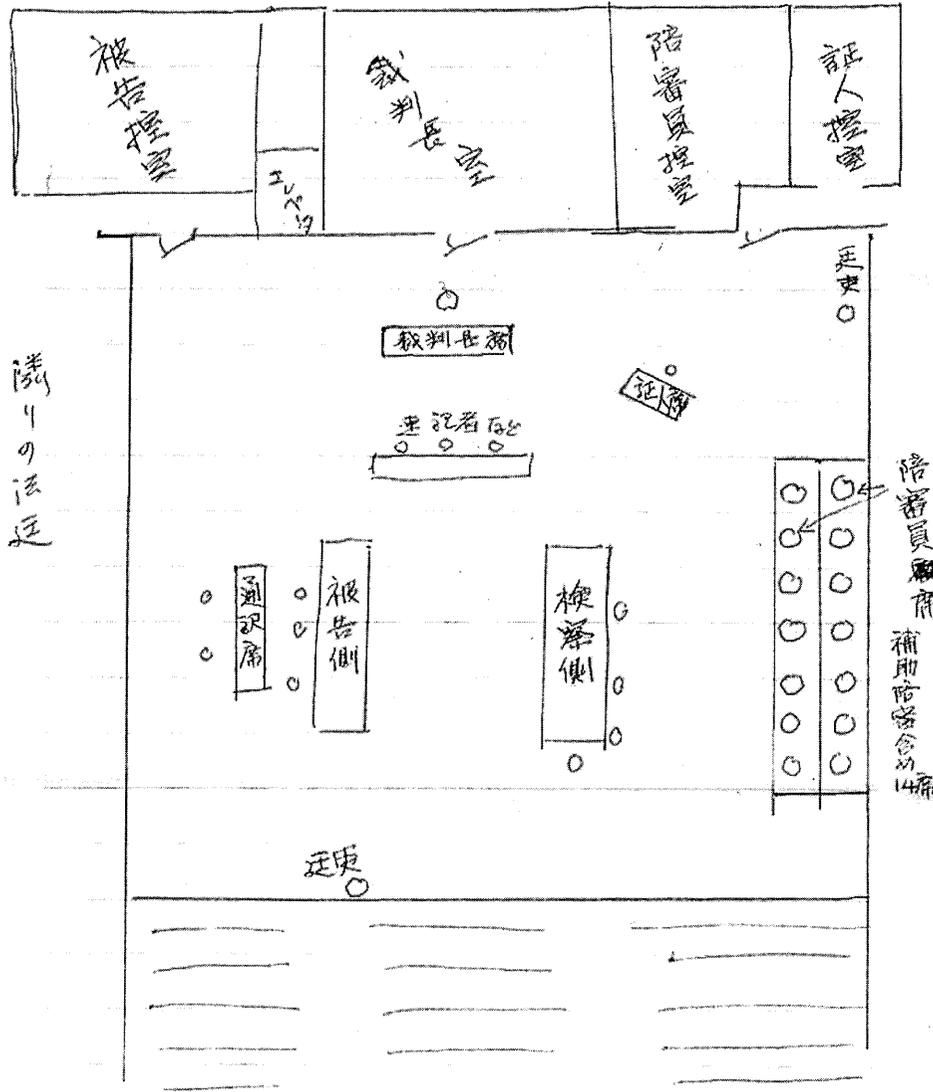
(e) 弁護人との秘密交通権に関して

弁護士に限らず大使館員や代議士、宗教上の司祭などはあちらでは秘密交通権が保障されている。まず面会所はガラスの仕切りが下方のみ開放されていて、物のやり取りやサインなどが出来る構造になっている。又、その必要に応じてくつろいで話せる部屋を用意してくれたりもする。でもこれで問題が起ることはほとんどないとか。しかるにこの国では接触が禁止されている。一応看守が傍について会話の内容をチェックしたりすることはないけれど、盗聴されるとか盗撮されるとかの保障はない。

それどころか弁護人との手紙も受信なら開封されるし、発信の場合は開封で出すことを義務づけられている。とても秘密交通とはいえない。対してUSでは発信はLegal Mailと付記すれば特別扱い

略図-2

略図2a2. 公判廷



尚、被告は陪審員が退廷する間、座を離れず陪審員の後

となる（発信のはX線透視をかけると云われている）し、受信物の場合は舎房区のカウンセラー（又はそれに相当する人物）が囚人と呼ば出し、目の前で開封して中に異物が容れられていないことを確認した上で手渡ししてくれる。中には一見しただけでフォトメモリーが働く職員もいるらしいが、そんなのがザラにいるわけではない。

実はこのシステムを悪用してHome送りになったのがいた。タイプ打ちした文書を毎日のようにある所に送っていたのだが、当局が不審に思っところり開封してみたところ内容は家族向けの通常文だったという。もつともこの話は同囚からの伝聞なので100%信頼できかねるが、いずれにせよ透視できる封筒を用いて弁護人が囚人に送ったものが開封されたという信じがたいあり方にはびっくりするしかなかったし、要は秘密交通権を全否定してることかと唖然とするしかなかった。

2、全共闘に関して

5月だったかと思うが、「全共闘プロジェクト」（正式名称ではないかも）なるところから手紙が届いた。それには（和光氏及び重信からもすでに賛同を得ています）という勧誘文が記されていた（あえて記すなら重信には大嘘たれという思いが強いが、そのような個人的感情は抜きにしてちょっとひかれた）。でも私個人は全共闘運動に直接関与していない。全共闘運動が爆発する前に大学を中退し、反戦青委運動へと転身したこと、その中で岡山大のバリケード造りなどに手を貸したこともあるが、それはまさにちょっと参加というより助っ人程度。ともかく他人に云える程の参加はしていない。

それ以上に唖然としたのは、そのプロジェクト主催者も記しても一向宗が共和国を創ってた頃はわが田舎は上杉謙信の支配下にあったらしいので、案外真宗王国になったのは前田利家が支配するようになってからかもしれない（誰が支配者であるかというのと宗教問題は別なのかもしれない）。話を元に戻すとわが（？）寺には四人の坊主がいたが、別にお経を読んでいるだけで生活してたわけではなく、各々が学校の教師などを主ななりわいとしていた。爺さんは腰を曲げ、手足を泥で汚すことをしなくせに銭・米を要求するあり方に腹を立てていたのだから、わが友はうむ一理あるとヒロヒトラー一族批判をひっこめたらしい。とはいえ、わが田舎では私より10才近くも年上の人達というと大半が中卒で職についたので、高校を卒業しただけで代用教員になったのだとしても、ましてや大学まで行った上で正式教員になったのであれば、寺の坊主共は特権にひたっていたと云わざるをえない。

云うまでもなく、アキヒトが学習院をエスカレーター式に出たことを考えれば、まさに特権階級でしかなかったことを示す。そういう点を指摘して爺さんに反論するアタマはわが友にはなかったし、その話を聞いた周りの者も口をはさむことはなかった。

脇道にそれるが、70年代の府中刑務所でも五厘刈り、五分刈りと云った。つまりまだ尺貫法の一部が生きていた。そのつもりで、15年に東拘で五厘と云おうとしたら「2mmですわね」とか「原型刈りですわね」と云われてびっくりしたことを付け加えておこう。

いずれにせよ、かつて尺貫法だったのがメートル法に換えられたように、天コー制に基づく年号を廃し西暦にすることは必要だった。何故そうしないで象徴とかなんとかドヘリクツを付して憲法の最初に天コー制を残したのかという大問題に触れなかったのは、敗戦直後の我々が親達の世代は勿論のこと全共闘世代の大失点と云

たが、アキヒトの評価。アキヒトの訪沖に抗議した人々の思いを踏みにじるものじゃないかという思いが最初に浮かんだ。かくいう私も小学5年の時だったか、ミチ子とアキヒトの結婚式のTV放映を小学校の講堂で見入った。なにしろ田舎の貧乏「村」ではTVなんてなかった。高校生の時友人から「駅に設置されたTVで力道山の時間に見に行った」という話を聞いたし、中にはすでにTVを有している家もあったとも聞いたが、それは田舎育ちの私には街の人間との格差をうらやましく思わせただけだった。とはいえ我が家にTVが入ったのは中学の時で、周りの家々にも競争するように普及していった。

中学生の頃、私の周りにはヒロヒトラー（という表現をしてたわけではない）の存在に不快の念を抱く友が少なからずいた。別にそういうことを話し合ったり、確認し合ったりしたわけではないが、人間宣言をしたはずの男が特別扱いを当たり前としてることへの不快感というか異和感を大なり小なり抱いていた。それはヒロヒトラー個人というよりも一族に対するものだった。そんな友人達の一人がTVでヒロヒトラーの映像が流れた時、こんな奴に大きな面させているのはおかしい、こんな奴を税金で養っているのはおかしい、普通の人間並みに扱い、仕事をさせるべきだ」という意のことを云ったそうだ。それに対して、その家の爺さんが（まあ、こんな一人ぐらい大目に見るべきだ、それよりも問題なのは寺の坊主共だ。うちの寺だけでも四人も坊主がいる。あいつら別に腰曲げて働いているわけじゃない。お経を読んでもただじゃ、そのくせあれやこれや口実をつけて銭や米などを巻きあげていく。そんなの考えたら天皇一人くらいええやないか」とわが友人をたしなめたという。田舎は真宗王国といって浄土真宗の強いところである。もつと

うしかない。そういう想いから私はかのアンケートは破り捨てたのであるが、GHQがというよりもUSAがこの倭国を支配するために残したことを認識する必要がある。そして、その憲法を平和憲法だとかなんと美化してきたこと自体を問わねばならない。

注解

○USの連邦刑には五つのカテゴリーがある。

一番厳しいのはSuper Max（コロラド、フロリダ）で、その以前はイリノイのマリオンがMaximumと云われてた。マリオンはSuper Maxが造られてからFCI（M）へと転換された。そのSuper Maxは、隣りの房との接触・交流を不可にするため入口が交互になっている。それ故、仮にCが運動などで見かけられるのはAかE、隣のDはBかFとなる。

尚、このSuper Maxが開設された直後は、運動時間は数名単位であったそうだが、じきに東拘並みの個別運動へと仕切りが設けられたとか。

次に厳しいのがHigh SecurityのUS penitentiary。これも以前は大きな運動場を使用できたが、すでにそこは3分割されている。私はその一つであるUSSPボーマントには9年間入れられていた。Penではよく集団抗争が発生した。手製のナイフ様のもの（アイスピック様のが多かった）で切りつけ、時には死者も出た。集団抗争というのはグループ毎の対立で時にはなぜそうなるのかと首を傾げたくなるようなものも少なからず発生。例えばDCの黒人とフロリダの黒人の抗争、対立。勿論、マフィア間の抗争などもあった。Penには罪名が終身刑、及び脱走（未遂）というのが多かった。又、

連邦刑では小便利刑であっても州刑からも背負わされてるのもいた。次が FCI、Federal Correctional Institution の略だが、これには中刑 (M) と軽刑 (L) があつた。早く云えば中刑はやや重く軽刑はやや軽い。

それよりも軽いのは Prison Camp。塀のない刑務所なのだが、収容されるのは US citizen に限定されていて、仮にどれだけ軽かるうと「外人」はここには入れない。着衣も Camp の囚人は濃いグリーン。他のムシヨの芝刈りなどを自走式のでやったり、畑仕事などもやつた。

いずれにせよ同じ地名で呼ばれても Pen、M、L、Camp は別々の刑務所で、そのカテゴリーまで聞かないと、とんでもない間違いを呼びかねない。

不思議なことに、私は「君は重刑にしかいけない」と云われたすぐ後に FCI (M) へと送られた。たまたまオクラホマの移送センターで運動の際に知り合ったのと同時にテラホトへと送られたのだが、最初にバスが着いた重刑で名前が呼ばれない。重刑では着いたとたん殴り合いということもあるので、何か事件でも起こったのかと思つていたらバスが動き出した。どうなつてんだこれは？と思つていたら、他の囚人達と共に中刑へと送られた。でもそこで二人だけが別扱い。なんのことはない新しい Pen が造られたので連邦刑唯一の死刑囚収容舎房区もその新しいところへと移送され

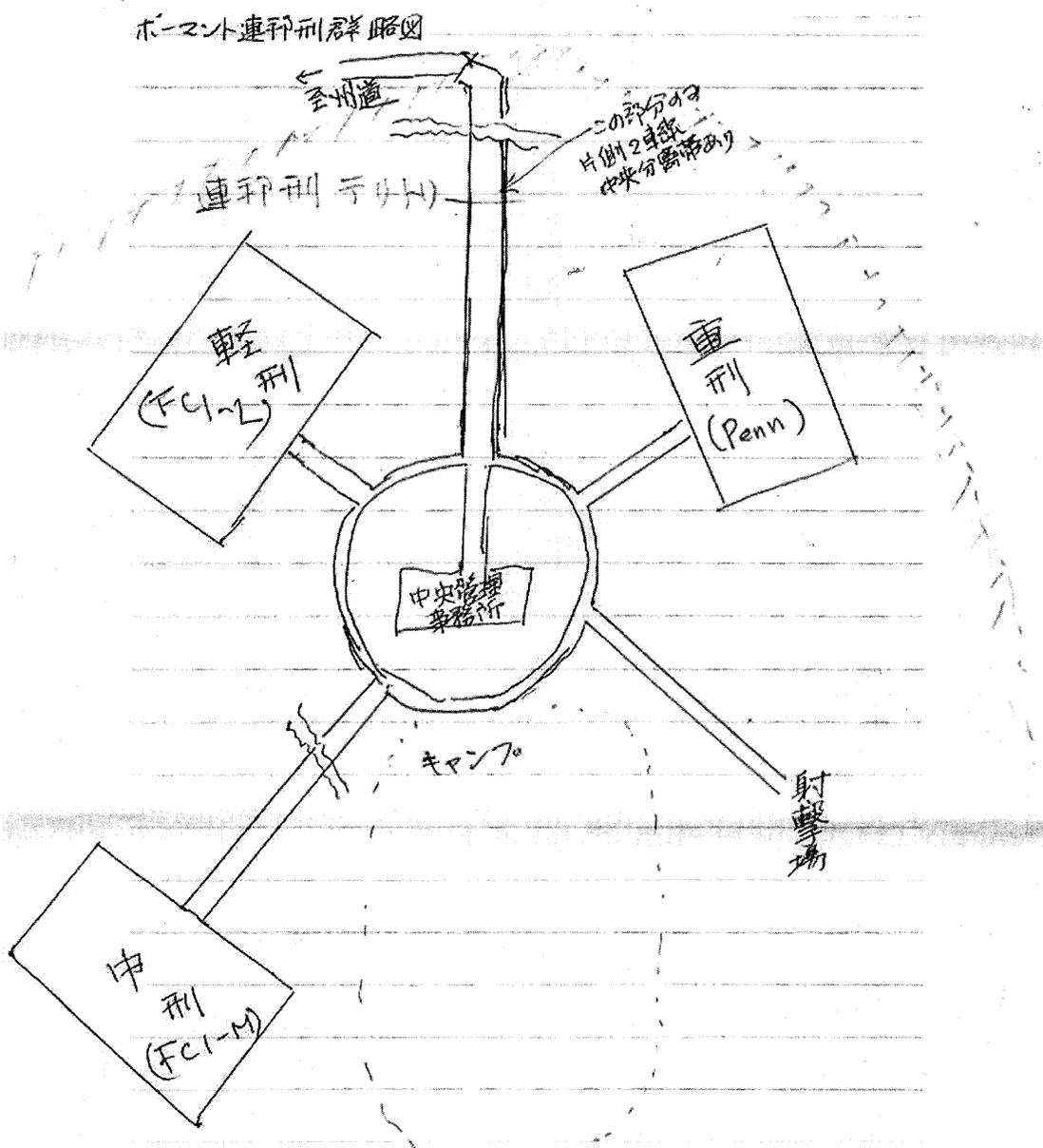
た。その空いたところには特殊な設備があつたこともあつて、それを活用せよという Bush shit の指示が出つて CMU (Communication Management Unit) が新設された。前述のようにかつての Maximum、イリノイのマリオンも中刑に改変されたが、そこにも CMU が造られた。尚、死刑囚房がそうだったように、CMU でも一人房だった。

ちなみに当初は釈放まで CMU と云われていたが、オバマになつてしばらくして本来の中刑へと移ることが可となった。中刑はすごく古い建物でいろいろと不都合なこともあつたがそれは略。

次に移つたのはミシシッピのヤズー・シティにある FCL、L。L は開放的な 3 人房。といってもブロックの仕切りがあるだけで隣りも丸見え、トイレ、シャワー及び TV ROOM は共用。ただし TV は (どこでもそうだが) 特定の周波数が決められていて、各自はその特定の周波数に合わせてヘッドホンで聞くという仕組み。すぐ近くで別の TV を視てるのが違う特定の周波数に合わせてるのでじゃまにはならない。もっとも私は基本的に TV は視ないのでこれは関係なかつたが。

あつ、ついでに云つておくべきなのは多様なムシヨが三つ以上あるところでは、通常の所長の上に Complex 所長がいる。正式名称は不明だが、我々の間では大所長と呼んでいた。云うまでもなく Complex 所長の方が地位は上。

略図-1



徳島大学での学生時代に城崎君と青春の「時間と空間」を共有した徳島大学時代の同志・友人のひとりとして、彼との出会いと48年目の再開について寄稿することとしました。彼との不連続な関係の中での3点についてふれたいと思います。

* * *

その1..東京拘置所での「48年目の再会」

(友人たちへの手紙2017・3・31)

先日(3月28日)、東京拘置所で城崎勉さんに面会しました。元気な姿で現れた彼とは48年目の再会でした。15分間の制約された面会時間でしたが、大半は私がしゃべって時間を使ってしまうました。面会では主に次のような会話をしました。

① 徳島大学1〜2回生の時の正月は、阿南の私の実家で共に過ごし、津ノ峰神社へ初詣に行ったこと。その時の私の両親もすでに他界したこと(彼は富山の出身でしたが、当時は帰省旅費もままならぬ時代であったため、県内の私の実家で正月を過ごすしかなかった)。

② 学生(運動)時代の共通の友人たちの思い出、現況など。

③ 彼がアメリカの刑務所で服役中に、私から手紙を出そうと努

力したがダメだったこと。

④ 日本での弁護士が「歯は早急に治療した方が良い」とメール通信に記載していたので「歯は治療したか」と聞いたら、彼は大きく口を開けて見せて、「まだだ」と笑って答えた。

⑤ また、彼は日本の新左翼についても「内部対立と分裂であたたたちも大変だっただろう」と気をつかっていた。

⑥ 「ところであなたは、今何をしているのか」と彼から質問があり、私は労働者福祉事業と社会運動資料センターなどに関わっている現況を伝えた。そして、昨日、新潟で、中国領事館の総領事に就任した日中友好交流の古い友人のお祝いに行ってきたこと。2月下旬にミャンマーを訪問し、アウンサン・スーチーさんの国民民主連盟(NLD)と新しい国づくりについて意見交換したこと、ミャンマーのパゴダは敷地内は土足厳禁で裸足でなければダメなことなどを話した。ネパールで長く居た彼からは、「ミャンマーとの国境の街に行ったことがある。ネパール人は裸足でなくても大丈夫だ」との話もあった。

⑦ また、彼の家族のことについても話をした。妹さんとは関係を持っていてのことであった。

⑧ 最後に徳大時代の「時間と空間」を共有した者たちは、恐らく自分(たち)にできることがあれば、それぞれの思いと責任

で関わっていきたいと思っているだろうと告げ、また、会いに来る。元気で!と面会を終えた。別れ際に、ガラスの向こうから「にこっ」とした彼の顔は、48年前の精悍な顔と同じでした。

その2..書評「私の一冊」『テロリストのパラソル』での彼への想い (地元新聞「私の一冊」)

この一冊は、95年度の江戸川乱歩賞と直木賞を同時に受賞し、多くの人たちから高く評価された著書である。しかし、私にとつてのこの一冊は、著者の「私と同時代を生きのびた友人たちに、そうすることなく去った友人たちに——」との思いとの出会いであった。私は著者と同じく団塊の世代であるが、同一世代というだけでなく、彼がこの一冊のなかで描いた世界、おそらく彼の個体史に基づくものも多いと思うが、この世界と共通して重なり合って強く印象に残っているものが二つあった。

その一つは、著書の中で主人公の島村圭介こと菊池俊彦が感じた「街の灯がきれいだな。去年の12月からずっとここ(東大駒場、バリケード封鎖していた第8本館)にいたのに、いままで全然気がつかなかったよ」との情景が、思いは別としても、私と同じ場の第6本館の屋上から見た音楽堂での「社交ダンス」の情景とダブって見えたことである。

同世代の圧倒的多くの若者が、自らの存在を問い、この日本、この世界をどうすると考えていた時代に「社交ダンス」をしていたこの男女たちは、きっと将来の日本の中枢にいるだろうと思ひながら、私の胸の中にある種の「怖さ」が走ったことが思い浮かんだ。

もう一つは、富山から徳島に来ていた大学の同級生であり、同志でもあった城崎勉の顔が浮かんだ。菊池の友人である桑野誠のインターナショナルな生きざまの中に、赤軍派に自らの「生」を見た城崎の生きざまが浮かび上がった。

彼は、『ダツカ闘争』による超法規的措置で「悠々と塀の外に出て行った」「瞳の中に火のともっているような男」(安部譲二著「塀の中の懲りない面々」)である。

私たち全共闘世代の青春は、自らを含めて全てを否定、疑うことから始まった。私は、今、まず全てを肯定し、この世に生あるもの全ての共生へ向かうことを第一として生きようと思っている。ラストシーンで菊池は「きょう、友だちをひとりなくした」といっている。さまざまな経過はあってもなお彼は桑野を「友だち」と言ったのである。このことに著者の「同時代を生きのびた友人たち、去った友人たち」への強い思いを私は感じた。

その3..私の手元へ届いた「50年前の写真」

(友人たちへの手紙2018・1・18)

まずは、城崎君の現況についてであります。昨年11月10日開催の日本労働弁護団(旧総評弁護団)60周年記念フォーラムへの参加にあわせて、11月10日午前9時すぎに城崎君に面会いたしました。

この面会に先立ち、20才前後の時に城崎君が大事にしていた写真50〜60枚(富山の実家、家族、四国学生新聞連盟合宿等々)が巡り巡って私の古い友人から私の手元に届き、そのコピーを彼に送付しておりました。

当日の面会では、私からは、

優しさを鎧で隠した革命戦士・城崎勉

足立 正生

○初めに

こんな呼び名をつけると、城崎さんは、湯気を立てて怒るだろう。初めて城崎さんに会ったのは、1978年になってからだ。前年の1977年9月末、日本赤軍「団結」部隊が日航機のHJ作戦（「ダッカ事件」の俗称あり）で、計6人の獄中者が「超法規的措置」でアラブ・パレスチナ戦線に合流して来たのは翌年になっていた。ところで、日本赤軍が獄中者を奪還した意図は、敗北を続けて来た日本の革命運動を発展させるために、相互の敗北の総括を突き合わせて論議し、次のステップへと革命運動を発展させるといったものだった。赤軍派や東アジア反日武装戦線、そして一般刑事囚との出会い直しを求めている。

城崎さんは赤軍派時代の活動などの総括すり合わせには合意した。しかし、彼の到達した総括地平は、武装闘争路線などを含む各総括課題をまだ独自に進めたいつもりがあり、「日本赤軍の要求には応えたが、組織に加入する気はない」と、組織としての日本赤軍へ合流を拒否した。

傍から見れば、組織と協働していれば、加入したかどうかは無視されてしまう。城崎さんが独自に自分を律して活動再開しようとした

域で活動し、その後は関西・東京を戦場にしていて、梅内と一緒に爆弾製造をやっていたらしい、という怪しげなものだった。

基地内の仲間たちを前に、彼は「ニダールです。よろしく」と、恥じらいながらも歯切れのいい口調で挨拶した。気合が溢れて勇ましい。実は、その後18年近い日々の闘いを共にするのだが、まさに革命を目指す青年将校面だった。

この、「勇ましい戦士」というのは、なかなか微妙な深みのある言い方だ。その強面の奥に、負けず嫌い、主観的な確信、厳格さと頑固さ、厳密さと形式主義が内側では渦巻いているということだし、その奥に溜まっている感性は、いわば「人情派で、涙もろい」本音が隠し持たれている。だから、優しさを求め合ってもそれが分かり合えずに、すぐに苛立ってキレたり、歪んだりする。確信に溢れた頑固さとは、その苛立ちと涙もろさを防衛するための鎧兜なのだろう。これは、城崎さんに限ったことではなく、私自身のことでもある。

○皆が大好物の献立騒動

だから、一緒にいる時など、彼と私は、日常的な些細な問題も含めて、何度となく他愛のないことで衝突した。殴り合戦になりかねない二人の傍に居合わせた者がその激しさを見て、「やくざの喧嘩か！」と批判するほどで、激高し合うと始末に負えない側面もあった。初めての口論は、当時の基地生活ではかなり深刻な課題で、担当制の食事当番を巡る争いだった。

私は、基地の外での交渉係もやっていた。ある日、知り合いの家族が豪華な肉料理を「仲間と一緒に食べてくれ」と持たせてくれた。冷めないうちに御馳走を食べてもらおうと考え、私は嬉々として夕

た城崎さんの立場を鮮明しておくのは、彼にとっては最重要で、まさに彼らしい一途な生き様を貫徹しようとしたのだろう。

城崎勉さんと私の直接かつ間接の協働年月は、長い期間にわたったが、パレスチナ最前線で、PFLPの戦士活動をもっぱら続けていた彼との直接協働は多い方だとは言えないが、それでも、なぜか頻繁に接触したり、その都度口論や喧嘩風の争いを多発させてしまった関係でいたりした。

そんな中から、彼の革命戦士としての活動ぶりを思い出しつつ、彼の優しさと生き様を語る幾つかのエピソードを書き綴り、再会を目指す縁にした。

○鎧を着た人情家

奪還された城崎さんたちと私たちが合流するまで、彼の人柄や闘争経験などは、新聞やラジオのニュースに書かれている事柄以外は何も知らなかった。仲間うちでは、赤軍派の「単ゲバ」隊長として有名だったらしいことや、M作戦の容疑者として逮捕されて有罪判決にあり府中刑務所に下獄中だったというくらいだ。基地生活では、本名その他を仲間にも明かさないうルールだったが、国内での誤報を含んだ噂話は多々漏れ聞いていた。それも、彼は四国と中国地

食に間に合わせるべく基地に持ち帰り、食事係の一人に自慢気に手渡した。

ところが、夕食に出て来たのは、スパゲッティを大鍋で茹でた「釜揚げ」だった。それはそれで、皆の好物でもある。しかし、苦勞して持ち帰ったアラブの肉料理ではない。皆は美味そうに、ふうふうと熱く茹でたスパゲッティをたっぷりと刻み葱を入れたツユで貪り食っているのを見ても、私は合点がいかない。「どうした。さっきの差し入れ、豪華なアラブ料理は捨てたのか？なぜ出さないの？」と訊くと、城崎さんが膨れっ面で「これが夕飯の献立通りなんだよ！」と言う。「そんなバカな、差し入れの好意を無にするのか！」と私が大声を出し、城崎さんは「差し入れくらいで騒ぐな！つべこべ言わずに出したものを食えよ！」と返し、「じゃ、アラブ料理は捨てるのか！」と即刻、熱い口論の開始リングが響き渡った。皆が食事中なので、食堂の外で続いても埒が明かず、その場は物別れにした。

これは、まさに典型的な、小学生じみた想いと都合の行き違いの拡大合戦なのだ。しかし、城崎さんと私は、2、3日は顔を合わせても挨拶一つしなかった。

後で、仲間が説明してくれた。あの日の食事係は城崎さんともう一人で、アラブ料理はもう一人が受け取ったので、食堂に持って行った。ところが、城崎さんは既に大釜の湯を滾らせ、細葱を山のように刻み終わっていた。なぜなら、週に一回しか出ない皆の好物なのだ。だから、城崎さんは早くから準備に掛かったのだ。食事係は二人居て、一人は差し入れは早くから準備に掛かっていた。食事係は一人は刻み葱を明日に回すと萎びて食べたものではない。どうするか？二人は苦悩した。それに仲間が数人加わり、無駄を出さず

解決する仕方を熱く論議して選んだのだ。釜揚げにありついて、皆が幸せだった。つまり、アラブ料理は明日温め直して食べる、今日は皆の大好物の釜揚げをやる、という結論を得ていたのだ。

そこへ私が入って来て「差し入れを食えー」と文句をつけた。それが城崎さんの琴線に触れた。大いに節約に役立てたつもりで城崎さんは、異論を叫ぶ私が全てをひっくり返そうとした、と怒り沸騰したのだ。そんな些細な事柄で喧嘩をするなど言うかもしれない。しかし、日本食など食べられない、遠いアラブの軍事基地の中での真剣な諍いだった。

○朝顔の花壇 騒動

レバノン高地の山腹に布陣した軍事基地には季節ごとの草花が咲いていた。日本の四季と比べると、3月は春、4月半ばからは長い夏になって9月半ばまで続き、10月の短い秋が来る。11月から3月までは冬で雪深く、全てが埋まってしまう。だから、四季ではなく二季の高山草花だ。

5月になると、もう初夏で日中の陽射しは厳しく、夜は夏でも冷え込む。その昼夜の温度差は17度を超えるから、私たちは1年中厚手の軍服を着こんでいた。

林の中に埋もれているとはいえ、夏の掘っ立て小屋兵舎は更に熱い。

特に、掘立小屋の食料庫兼食堂は午前8時半くらいから、ボイラー室並みに熱くなっていく。既に汗ばんで撰る朝食の話題で「この暑さをどう防ぐか？」が何度も論議になった。

例えば、谷川で汲み上げた水で屋根と前庭に2時間毎に打ち水を

していた。それには、誰も反論しなかった。

○元、塗装工は、密かに針灸師へ

これはガセネタ情報ではない。城崎さん本人が「持病を持っていて」と言っていた。

北陸で育った幼少時から、冬の厳寒時になると手足の霜焼けとひび割れが酷い体質だったらしい。もうひとつは、これはガセネタ情報としか思えないのだが、国内での地下活動中に「塗装工」をやっていたらしい。その時に、塗料に含まれているベンジンを長年にわたって吸い込んでしまい、全身の細胞活性力をもたらず内蔵機能が劣化してしまった。通常の人間の数倍の速さで筋肉疲労に襲われるし、眩暈に襲われて失神する。奇病をダブルで持つてしまっている。したがって、彼は、作業や任務の動線を厳密に計算して訓練するように行動を磨き上げる必要がある、と主張していた。

そう言えば、私たちの仲間には、元「塗装工」がもう1人いた。それは丸岡さんで、北大路欣也ばりの美青年だったが、塗料のベンジンを浴びすぎて、見る見るうちに頭髮が抜けて薄くなる「職業病」を患ってしまったと主張していた。これは、医学的かつ化学的に正しい説か診断かは、まだ詳らかではない。

それはともかく、パレスチナ難民キャンプでは、貧困が基底にあるのだが、医療施設や水道や電気のライフラインが絶対的に欠如している環境で、各種の疾病が増え続けていた。その上、貧しい難民キャンプは、安かろう良かろう方式で、欧米では決して市場販売されない試薬が治療に大量に使われ、強力なだけで知見の少ない試薬が各種の副作用を蔓延させる大問題が横たわっていた。

撒こう、いや、食料庫部分を残し、それ以外の壁を全て剥がして吹き通しにしよう、それよりも、蔦草を植え育てて小屋全体を蔓で覆おう、などの企画が出た。とは言っても、すぐには誰も何も始めなかった。

ところが、ある日の夕暮れ時、城崎さんが、どこかで手に入れたタコ紐で粗目の網を編んで屋根から壁面を全て蔽う作業にかかり、せつせと一人で完遂した。網が立ち上がる足元には水が撒かれ、何やら埋められている。彼は「朝顔だ。これで正午からの太陽熱を少しは防げる」と満足気に笑う。

数日後、基地外での仕事を終えて戻ると、タコ紐の網が南西方角だけでなく東向きにまで拡張されている。「城崎さんは張り切ったなあ！」と感心して、城崎さんの姿を探したが見つからない。仲間たちに訊くと、「その話は、今や城崎さんの前ではタブーになっている」と説明してくれた。朝顔を育てるのに詳しい仲間が、「山中の霜と露が多い基地では、朝陽に当てて温めないと朝顔は育ちにくい。だから、早朝から正午までは朝陽の方角の中で育てるべきだ」と主張した。

しかし、城崎さんは、「最強の午後の陽射しを避けるために朝顔の棚を作ったのだから、本来の目的通りに育てるべきだ」と怒り、網棚を引き千切って捨ててしまった。皆は仕方なく、それを東側に張ったが、城崎さんの主張通り西陽を遮るのも必要なので、タコ紐の網を作り足して、元の壁にも張った。城崎さんは怒ったまま、それで降、朝顔には見向きもなくなった、と言う。

やがて朝顔はすくすくと食堂小屋を覆い、満開になり、小屋も圧倒的に涼しくなった。やがて城崎さんも2面に咲きそろった朝顔の棚を嬉しげに見て周り、「どちらの面でも満開じゃないか！」と嘯

これを何とか解決できないかと、私たちの仲間も模索を続け、東洋医学による治療を開始してみようと考えた。そう言えば、針灸治療は元々アラブ地域を起源にしている。それが、アジア大陸を東方に向かって進む中で発展したものだ。「針灸こそ！」と確信して治療を始めると、なかなかの効果が積み重なった。劇団「発見の会」を主宰していた瓜生良介さんが針灸師であることを想い出し、出張治療を試してもらった結果は大きく伸びた。それからは、国内で呼び掛けたボランティア針灸師が続々と出張して来て治療活動は難民キャンプの外でも拡大し、年に一度か二度の「サマー・キャンプ」の治療キャンペーンを開催定着させるまでになった。

そのボランティアの一人に、関博明さんがいた。赤軍派時代の城崎さんの仲間で、治療の傍ら、かつての仲間たちのその後の活動を報告し合うなど、大いに交歓したりした。

それが、元「塗装工」の城崎さんが針灸治療を始めた切っ掛けになった。しかし、城崎さんは自分の身体を被検台にして、密かに針灸治療の研究に励んだため、仲間たちはあまり詳しくは知らないでいたが、彼の針灸師としての治療技術と経験は大いに発展していった。しかし、その頃から日本赤軍は「アラブでの団子状態」を解消して世界中に活動を展開する方針に入っていたので、城崎さんとの協働は全くなくなっていった。

○ネパールからの招待状

城崎さん逮捕の報「ネパールのカトマンズで逮捕された！」「ネパールからワシントンへ米軍用機で秘密裏に移送された！」というニュースは、ラジオとTVニュース、英字紙で知った。だが、なぜ

彼が発見され、まして、逮捕される羽目になったのか、連携を直接担当していない私には、いくら分析してみても不明だった。

しかし、数日後、城崎本人からの手紙がレバノンの首都ベイルートのPFLPの機関誌『アル・ハダフ』（「標的」）の私書箱に届いた。彼が逮捕される前の日付のもので、切手はネパール発行、カトマンズでの投函受付印。しかし、不可思議なのは、封書の表一杯に押しである消印だ。日付順にロンドン、テルアビブ、パリ、そしてベイルートへと転送を重ねて来たものだ。その転送は、反テロ秘密機関が手紙を転送しながら読み合い、逮捕後に届くように操作したこと、それを私たちへの恫喝として知らしめたことが伺え、怒りが爆発しそわになった。

しかし、手紙を読んでいると、私は悔し涙を流すしかなかった。城崎が書いてきたのは、元来、アラブ地域の人情と気候は、あなたには向いていない。活動領域も得意分野で無理を重ねている。ネパールの人の人情は温かいから、あなたにピッタリのはずだ。山々と広大にひろがる風景は、人間としての故郷に戻った気になる。針灸は大いに有効なり」という、だから、すぐにネパールへ来いという招待状だった。

やがて、遅ればせながら現地の情報を集めると、彼の逮捕に至る事情が分かり始め、彼ならではの生き様を如実に物語っていた。

彼は、数百人の窮民が無料で寄食寄宿できる有名寺院の一つを見つけて通い、そのクリニックの無料診療医師たちに加わった。窮民たちや寺院では、彼の針灸治療は評判が良く、慕われていた。しかし、ある日、患者たちの治療順番を決めるのに、寺僧たちに賄賂を密かに受け取っている者がいることを知った。賄賂と言っても、窮民が出せるのは5円や10円というわずかなものだ。しかし、それ

で、ゆっくりやりなさい」と宥めるほどだった。彼は一直線に無罪を主張し続けたが、保守政治で腐りきった裁判員と司法は、彼に有罪の判決を押し付けた。無念やるかたなしだったろう。

下獄前の城崎さんは、「ほら、やっと治ったよ」と赤切れと霜焼けの傷痕をみせ、元気だった。

そして、彼が下獄した先はなんと、作家の安部譲二にボクシングを習い、安部さんに小説書きを勧めつつ一緒に入っていた府中刑務

城崎通信

ようやく城崎通信が作られる。未決の間は、なんだかんだで顔を見る機会も、彼の近況報告に接する機会もあったのに、下獄以来この国の行刑制度の最汚点に阻まれて、それがかなわなくなっていた。どんなに親しい、何年も一つ釜の飯を分け合った仲間であっても、法務大臣の命令で同時に国外で釈放された仲であつても、ほやほやの前科者の私には受刑者との交流は許されない。私が見本的な社会復帰先輩になる玉だとしてもだ。本当に勿体ない。

さて、何を話そうか。20余年のブランクを隔てて、東京拘置所で会った城崎君は、なんと紅顔の美爺さんになっていた。そういえば若い日の城崎君はアラブの女性たちに大もてだった。いつもニコニコして大口を開けて高らかに笑う、よく気が付いてこまめに動

は、城崎さんにとっては許しがたい大問題だったので、徳の厚さで有名な高僧に、即座に止めるべきだ」と訴えた。寺院側は、重病者から順番に診るという慣例になっていたので表沙汰になるのも憚れるし、賄賂を咎めながらも、訴えた城崎さんをネパール奥地の支所に派遣することで解決を図った。城崎さんは、無料診療が改善されればいいのだから、文句はなかったらしく、人情も更に厚い奥地へと喜んで赴任して行ったらしい。

ところが、城崎さんには問題が一つ残った。仲間への「安全で居る」という連絡発信くらいは保つ必要があった。だから、郵便局もない奥地からカトマンズにまで出て手紙を投函する必要があった。やがて、その動きを見ていて訝った者が現地警察に通報し、フォローされ続けてCIAに情報が流れ、逮捕にまで至ったのだった。

こんな、プリミティブな活動システムのミスで捕縛された城崎さんは怒り心頭に達していたであろう。しかし、その怒りを誰に向けてる訳にもいかない。残念である。

○城崎さんとの再会

約20年ぶりに城崎さんと再会できたのは、米国の刑務所での18年間の獄中生活が満期で釈放され、全く不当にも、日本検察が「同罪の再審を禁じる」国際法を無視して、「殺人未遂」と「偽造有印公文書行使罪」で起訴した公判廷であった。日本の司法が「超法規的措施」で城崎さんを釈放しておきながら、その恨みをぶつけるような検察側の証拠もない荒唐無稽な容疑への論証は、お粗末の限りだった。城崎さんは検察とその証言者たちの非論理性に怒りで胸を詰まらせ、涙を浮かべて訥々と反論を試みた。裁判官が「落ち着い

所だ。「また、ここか。まあ、いいや」と諦めながらも、やはり自分律して生き抜くだろう。

今や残り8年程の刑で閉じ込められている彼との出会い直しは、待つしかないし、監獄法の逆行する厳正化のために面会もままならない。再び三度口論と喧嘩風情での交歓を大いなる楽しみにする他はないじゃないか。

浴田 由紀子

くそこそこの美青年、まあそうだろう。モテるとかモテないとかいう世界を回避して生きている私には無縁なことだ。

フフ彼女たちは彼の本性を知らない。「実はあいつ内弁慶でね。たまに会うお友達をやってる間のお楽しみだよ」なぞという意地悪は口が裂けても言わない。腹の中でククク……と密かな優越感に浸るだけだ。

優越感の根拠は山のようにある。三晩たつて七晩たつても話しくせないだろう。どれから書こうかと迷うほどだ。かつて、まだ30代の世界浪人であった私は、世界某所で「喧嘩おユキ」なぞという誇り高い名で呼ばれていた。

喧嘩には当然相手が必要だ。その誇り高い対戦相手に選任されて

いた1人が他ではない城崎青年。私たちは3日にあげず喧嘩をした。私は筋の通らない話と、理不尽は許さないという断固たる信念を生きてきた。

多分彼もそうらしい、が互いの筋も理不尽も正義も、状況認識も当然違う。どちらも自分をとらえ返すとか、譲るとか、相手を思いやるとか、人に学ぶとか、謙虚とか *etc.* その類の美德語とは一切無縁をヨシとしている。まして我々は正義を看板に世界を渡ろうとしている世界革命浪人だ、譲れない。ぶつからない理由は何も無い。好むと好まないに関わらず喧嘩になる。基本的に勝敗はつかない。彼が私の「理不尽に」あきれ果ててブンブンしながら席を外すことになるからだ。

そうなるをたいいてい、人並み以上の物忘れ能力を持っている私は、お茶やお菓子を与えられたり食事の時間になったりすると、コロッとさっきまでの怒りも理不尽も悔しさもストンと抜けて、にこやかに敵は甘い饅頭なんかを与えてしまふ。そうして後悔する。

「しまった、アイツには口を利かない決意だったのに」

と。そんなわけではなかな勝てない。でも未だに、密かに正義は私にあったのだと自認している。なぜなら、大げんかをした後しばらく会えなかつたりすると、なぜか私は彼からの「プレゼント」なるものを受け取ることがあったからだ。かわいではないか。面と向かつては「ごめんね」を言えない子供が、こっそりとお母さんの喜びそうなお手伝いをしているような。「まあ、アイツにもプライドと言うのはあるのだろう」などと私はほくそえむ。

そんな日常の中でその事件は起こった。ある日は新型のジャマーというものを買ってきた。我々を前にして、いかに新型であるか、

な若い女性に勝る平和創設者はなかなかない。勝てる頑固おやじもない。正義だの筋だの理不尽だのに太刀打ちできる自称革命浪人もいないようだ。彼は明らかに自分に理のあったあの日の出来事

いかにして使うかをひとわたり講義して「オッチョコチョイもいるから用心して使うように。壊すんじゃないぞ」と言い残してその場を離れた。

もちろん私たちは、はれ物に触るような警戒心を持って新品のジャマーに湯を入れ、大事にテーブルに置いた。がしかし、数分後にジャマーはテーブルを離れ、床に落下してぐしゃぐしゃに割れたのだ。アッラーアクバル、何という神の計らいであることか！全員青くなつて顔を見合わせる。

もうすぐ夕食だ。城崎君がこの事実を知った時のことを考えると誰もが時計の針を止めて巻き戻したくなる。次々に仲間が夕飯に集まってくる。割れたジャマーも床の水も誰かが片付けた。しかし、買ったばかりの新しいジャマーがこの夕食に登場しない道理はどこにもない。誤魔化しようがあるだろうか？皆が引きつっている。

「来た！誰かが小声で言う。一同入り口を見つめる。にこやかに笑う城崎君が「エ？皆どうしたの？」という顔で見渡す。もちろん私はすでに目以外全身こわばるしかない。皆が息をのむ。

と、突然若い女性の声「城崎同志、あなたは今、人を許す心の余裕をお持ちでしょうか？」と。「うっ」と身を引く城崎君を見たような気がする。3呼吸位の間をおいて（明らかな笑い顔を作って）彼は言った「もちろん、いつでも私は」。「実は、先ほど同志が買ってこられたジャマーはすでに壊れました。上等ではあったのですがコンクリートの床には勝てなかつたようです」彼女は腰のへしゃげたビカピカのジャマーをかざす。

城崎君無言。夕飯だというのに無言で部屋を出る。声は出せないのだ。つい数十秒前に寛大な心を公言したばかりなのだから。

やつたぜ！我々の勝利感がどれだけのものではあつたことか。聡明

を覚えているだろうか。喧嘩おユキは、おりこうを強いられる娑婆暮らしのうっとうしさに飽き飽きして、一日も早くまたあの連続バトルな日々を再現したいと、首を長くして待っている。

旧交を温めるといふこと——ソフト内ゲバ克服のために

大菩薩軍事訓練被告 大越 輝雄

〈民衆への信頼と絶望〉

60年代後半に学生時代を過ごした僕たちは、通過儀礼として初期マルクス——「経哲草稿」「ドイツイデオロギー」などで世界の構造に出会い、吉本隆明、橋川文三、石原吉郎、内村剛介、埴谷雄高、鮎川信夫などの言葉の魔宮と（政治と文学）の關係性に翻弄されていた。「あいつは敵だ。敵を殺せ！」が政治のリアリズムの核心であることに呻吟していた埴谷雄高の著作で読んでいたころ、僕は鶴見俊輔という（水平性）を持った人物と、ベ平連や思想の科学サークルを通じて交流し私淑していた。鶴見さんは市民運動から学生運動、政治運動—共産同赤軍派に傾斜していく僕を決して批判することなく、「肩の力を抜くようにしなさい」と声をかけてくれた。

「あいつは敵だ！敵を殺せ！」と肩を怒らせる政治のリアリズムの中で、多様性と水平性を持つて肩の力を抜く僕の運動スタイルは、

当然のように党形成に向かうのではなく大衆運動に傾斜するものであつた。社会主義革命——国家の死滅と階級の廃絶——を職業革命家としてではなく、工作者として活動する道である。赤軍兵士を軍人として位置付けるよりも工作者として位置付けるのが中国紅軍兵士の「三大規律・八項注意」でありポー・グエン・ザップの「人民戦争」であつた。

1969年11月6日大菩薩軍事訓練はいわば自由民権運動の「加波山事件」であつた。加波山事件は福島事件や群馬事件弾圧で追い詰められた青年活動家が「魁」の旗を掲げて爆裂弾で武装蜂起しようとした闘いである。もちろん政治的、経済的時代的背景の違いから単純にアナロジーすることはできない。共通点は、抑圧された民衆が、先駆的な決起に賛同し、首相官邸、国会を中心とした霞が関を包囲してくれるだろうという願望であつた。いわゆる「前段階武装蜂起」「攻防の弁証法」であり、それは民衆への深い信頼が基底となつていた。こうした信頼は1970年3月31日のよど号ハ

イジャック闘争での、機内における乗客との関係性にも表れている。同年11月の三島由紀夫の市ヶ谷自衛隊突入・自決は逆に自衛隊、民衆への深い絶望を背景としている。

〈ソフトな内ゲバ克服のために〉

民衆に対する信頼か絶望かの分岐が1970年の赤軍派の分岐の背景にある。すなわちM作戦から連合赤軍に至る道筋は民衆に対する信頼⇨前段階武装蜂起化が、不信感、絶望から「共産主義化論」⇨銃の物神化に至ったのである。M作戦はそうした過渡期の闘いであった。後に連合赤軍に至る仲間も含めて、大菩薩峠軍事訓練、よど号ハイジャックの大量逮捕の後を担ったのは、東大闘争、4・28沖縄闘争、アスバック闘争などの釈放組、大菩薩峠未成年釈放組、地方大学リクルート組などが中心であった。赤軍派分派闘争を直接知らないながらも、それぞれの闘争経験から軍事闘争の必要性を実感し、「赤軍派」を選択肢としていた。

大菩薩峠中組は獄外の闘争を支持しながらも、その大部分は後に清算派といわれた。「臨時総会派―東京都委員会」―民衆との信頼の回復と資本主義批判―階級と国家の廃絶のための闘い―労働現場へと傾斜していった。他方連合赤軍に至る獄外赤軍派は、前段階武装蜂起の準備のために「PBM作戦―人質、占拠、資金」を実行する党的団結を第一次赤軍派（結成からハイジャックまで）の小ブル急進主義批判を基軸に展開していった。

『追想にあらず―1969年からのメッセージ』（講談社エディ

トリアル）での僕の拙文は、僕たち大菩薩グループとM作戦以降のグループとの違和感―ソフトな内ゲバ状態の克服を含蓄していたものであった。それは民衆との距離感である。あさま山荘における牟田やす子さんへの対応は極めて評価されるものであった。オウム真理教の民衆蔑視、民衆不信の対応とは対極をなしている。

〈獄中―獄外を結ぶ民衆との信頼関係〉

「民衆との距離感」が赤軍―連合赤軍を振り返るとき大きな補助線になることを現在課題にする背景には、1989年冷戦終了後30年、資本主義の勝利から崩壊の過程で登場した新自由主義―グローバルイズム、ポピュリズムの登場がある。カジノ資本主義による富の集中と格差の拡大の中で自国第一主義の骨格をなすのが右派ポピュリズムである。トランプ、ルペンなどの右派ポピュリズムは内向きの自民族至上主義で、他国、多民族への攻撃的蔑視の上に成り立っている。他方左派ポピュリズムは熟議民主主義、闘技民主主義など民衆を主人公にした民主主義の点検から、コミュニズム⇨直接民主主義から権力奪取を展望するが、ギリシア―シリザ、スペイン―ポデモスなど苦戦を強いられている。

こうした民衆との関係性の議論が深化されることなく50年が過ぎようとしている。民衆との関係性を基軸にして、多くの友人、仲間のソフトな内ゲバを克服し、現在有期刑で獄中にいる友人たち、弾圧にさらされている仲間たちとともに、権力包囲の陣形を整えていきたい。

城崎さんの笑顔の向こう側に見えるもの

西垣内 江春

私は城崎さんとは面識がなかった。インターネットや新聞、テレビ等のマスメディアに登場した彼の人物像を知っているだけでした。公判が始まって初めて生の顔を見せてくれ、「ああ、いつもニュースで見ていた城崎さんだ」と認識した次第です。

彼は、被告席に座る時は必ず、傍聴席にいる人々に笑顔の挨拶をしていました。

それは開廷のたびに、マレーシ・足立の隣にいつも座っている私や傍聴席に通っている馴染の顔を見つけては挨拶をするほど、余裕と元気さを見せ始めていました。

彼と個人的には交流したことがないので、少しでも彼のひととなりを知りたいと、拘置所にいる彼に面会に通いました。ですが、話せる内容も限られてしまいました。それでも、受けた印象は、欲がなく、花の好きな、そして笑顔の美しい人という印象でした。

前置きが長くなりました。そんな訳で、城崎さんについて何を書いているのかも分かりません。私が東京拘置所で面会した時にたまたま書いていた数少ない報告メールから、その時々に見せた城崎さんの様子を汲み取ってください。

2016年12月1日（水） 城崎さんへの面会第1回目

城崎さんとの面会に行ってきました。

話していると、歯の根も合わぬほどガタガタ震え、両手の甲をすり合わせています。

待合室や廊下は少し暖房されていますが、ガラスで仕切られたあちら側は暖房なしのこと。

拘置所の暖房はいつから入るのか？と帰りの窓口で聞いたのですが「お答えできません」という返答でした。

この日はお腹一杯お菓子でも食べて、皮下脂肪を蓄えて寒さ凌ぎにしてもらおうと、拘置所面会口前の「池田屋」さんで柔らかそうな菓子をたっぷり、そして、お花の差し入れを頼みました。

帰りに、バシータ・クマと会ってその状況を話すと、次の日早速温かい衣類を差し入れてくれました。

2016年12月5日（月） 城崎さんへの面会第2回目

寒冷地のショッピングセンターを訪れる機会があり、「極暖」用のズボン下とシャツ、モコモコ靴下、裏起毛ネルシャツを手に入れました。マレーシ・足立と再び城崎さんに差し入れ面会に行きまし

た。この日は城崎さんの誕生日。

「お誕生日おめでとう」ってご挨拶。このところ、連日暖かな日が続いて来た、と機嫌は上々。

しかも、「先ほど温かいコーヒーを飲んだので、身体が温まった」と終始ニコニコ。

マレーシ・足立は、自分が旧東京拘置所に入っていた当時の話などが弾み、城崎さんにこの付近の地理を知っているか？と質問すると、全然知らないとのこと。

帰り道、陽の当たる綾瀬川沿に歩いて橋を渡る。途中で橋の上から川を覗き込むと、妙に寒々とした気分になってしまう。その光景に耐えられなくて、面会に来るたびに怒りに溢れた気持ちを静めるために、川面を眺めながらワンカップを飲んでいたという知人の話を思い出して、城崎さんにもこの風景を見せてみたいと思った。

ついでに、案内マップを入れようとおもった（マップは差し入れOKみないです）。

城崎さんの霜焼けは酷くて、手だけではなく耳たぶまで赤黒くなっています。耳の霜焼けにつける薬は差し入れできないので、筆記や本を読む時邪魔にならないようにと、せめて指先をカットした手袋を探して差し入れすると言っていると、手袋は一つしか持てない、選ぶ羽目になるのでいらない、ということでした。

新聞は朝日をとっている。差し入れの読み物は沢山溜まりすぎて、欲しい読み物は今のところないそうです。

手紙は1日一通しか出せないの、みんなに返事を書いて出されない、と言う。誰かの手紙に、追伸風に書き込んで託せば、と勧めた。話を聞いていた係官が「昔と違って今は許可されない」と教えてくれた。

10階の面会室受付前で待たされたことは今までなかったのに、今日は10分程待ち。

城崎さんの意志は、結論を言うと「当然尾寄弁護士が受けてくれるのかと思って対応していた」ということで、笑いながら「お願いしますって頭を下げればよかったかなあ」と、尾寄さんの代わりにマレーシ・足立に向かって頭を下げました。

お誕生日に差し入れた花束を今日受け取ったそうです。「簡素な房の中で花の色があるだけでもいいよね」と雑談。

面会室はコートを脱ぎたくなるほどの暖かさでしたが、ガラスの向こう側はやはり寒そうです。

モコモコ靴下がとても暖かくていいと気に入ってくれました。

面会に来てほしい人はいませんか、と聞くと、「特にはいない。長い間不在だったので、知人がいない……」と困った表情になった。そんな質問の仕方が悪いとマレーシ・足立に諭されたけど、続けて「本音で話せる相手がほしくありませんか？」と重ねて聞くと、さ

面会人の申し込み体制について、11月までやっていただけとおり渡辺さんがやることにする旨、伝えました。

帰りに池田屋で誕生日のお花を注文（この日はもう差し入れ納品終わっていたので、花だけは木曜日に入るそうです）。

彼の故郷の味を楽しんでもらおうと、ズワイガニの缶詰やおかずになりそうな幾つかの缶詰と果物缶詰。入荷したばかりというお菓子ケーキを何種類かを気張って注文しました。

しかし、東京拘置所は遠いですね……。

*差し入れ表を記入し、印鑑を忘れて人差し指で指紋押印。差し入れするときは、印鑑忘れずに。

*拘置所の年間電気使用量で決まっています、今年は面会人が暑すぎて熱中症で倒れたため（エアコン入れるべきとクレームが相当入っていた）外部の人員に冷房を少し多めに使ったため、暖房を節約しているらしい。実に非人道的なところですよ。

2016年12月8日（木） 城崎さんへの面会第3回目

マレーシ・足立と上野に用事で出かけていた時に、「尾寄弁護士が城崎さんに面会した。控訴審についての諸般の話は出来たが、控訴審の弁護士団に入って下さい」という明確な依頼は受けなかった」と聞き、昼過ぎではあったが、面会へ急いだ。

それは、明日9日に「弁護士+救援の控訴準備の打ち合わせ会」の予定があるので、城崎さんの意向を少しでも明確化しておいた方が良く考えたからでした。

面会枠が残っているかどうか不明で不安でしたが、綾瀬川の橋を走って渡って着くと、幸運にも受付窓口で「OK」が出て、即、面会。

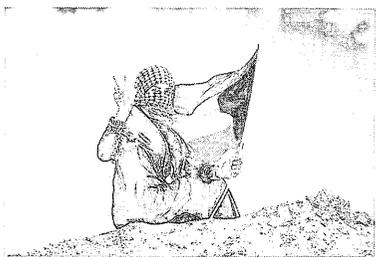
らに苦笑を大きく漏らした。

人民新聞1599号に、城崎さんが見せた、人懐っこい笑い顔は、苦しい戦いを支援すべく面会する者を、逆に励ますかのようですよ。と、遙矢さんが面会報告を書いていたけれど、まさにその通り。

ガラス越しの面会ではあっても、寒い川つぶちを殺伐とした気分で歩いた後だけに、温かい気分で帰り道を歩ける程の笑顔一杯の元気がもらえました。

みなさん、時間が取れる方は、城崎さんの面会に行ってください。独房にいる彼が、廊下を歩き、私たちが持ち込む外の空気を吸えるチャンスを多くしたいのです。

●現在、城崎さんは府中刑務所にいます。面会は基本的に身柄引受人、親族、弁護士に限られています。手紙は受け取れます。また本などの差入はできません。



江戸っ子

城崎 勉

かつて、カトマンズ市内の西側にある通称モンキー・マウンテンの登り口の脇にある小さな食堂に坐っていた。食堂といってもほんとは小さなもので、四人掛けのテーブルが四つぐらいで、出せるものはごく限られていた。私はそこで誰かとモモ（チベット語でギョーザのこと、ネパールではこれが通称）を食いお茶を飲んでいた。

そこへ、三人連れの日本人の女性がやって来て、「わあー疲れた！」と口々に云っていた。そして、私に対して「それってギョーザ、えーつとこの国ではモモというのですか？」と尋ねてきた。

「ええ、これはモモです。この国ではギョーザ風の形のものど、ちよつと違った形のシューマイ風がありますが、どちらもモモと云いますよ」と答えた。

三人娘のうちの一人が「あれ。日本人なんですか？」と尋ねてきた。同席していた日本人青年が「この人はフィリピン人。だけど日本語ペラペラだよ」と答えた。その上で、「どこから来たのか」「どこに泊まっているのか」等々を尋ねた。まあ一種のあいさつのようなものだ。

三人の中のリーダー格の女の子が「江戸っ子ですよ」と答えた。そこで私が「へえー、江戸はどこですか？」と尋ねると、板橋だということを探ると、父親は確か信州の出身、母親は浜松の近くだとい

は口に出さなかった。

他方で私はこの白人達に（この急な石段を登らなくても、少し左方へと歩を進めた上で、ゆるやかな石段を登っていくと頂上の寺院の裏に出るので、そこから更にゆるやかな登り坂を行けば頂上にいけるよ）と伝えた。それを聞いて白人組はぜん元気が出たようであった。

三人組も私が説明したことがおおよそ判ったようので、「えー、そんなの知ってたら、こんな疲れる上り下りをしなくても良かったのに……」

「もう足がパンパンになって何もしたくなくなるってこともなかったのに……」

白人達に説明した時、裏の中段のところから北方へと下りて行く私と私が泊っているテラワダの寺院のところへ行けると云ったこともあり、「君はもう永いことここに居るのか？ 仏教の勉強をしているのか？」などと尋ねてきた。私はこの国にはまだほんの数ヶ月いるだけだし、仏教の勉強はしてはいない。たまたまルンビニへ行つた時、この坊さんの一人と知り合ったので、そこで彼がやっているフリークニックで鍼灸活動をしている……と伝えた。

「えっ、君は鍼灸師なのか？ では、これから今云った道での山越えをするか？」と尋ねてきた。

「いや、いくらゆるい上り下りとはいっても丘を越えるのはやはり疲れる。私はこれから右回りで歩き、この丘の約4分の1くらい行つたところにその寺の入り口があるので、その方へと行くのさ」と答えた。

「ふん、それでまた鍼灸活動をやるのかい？」

う。要は生まれたのが23区内であるというだけで、とても江戸っ子とは云えないのだが、彼女のカテゴリでは「江戸っ子」となるらしい。また他の二人は共に三河か遠州の出身で、リーダー格の母親の出身地と近いことから仲良しなのだという。それにしても江戸と現在の23区とはかなり違うのに、そういうことが判っていないのはちとびっくりした。もっともかく云う私も三河と遠州の区分も判っていないのだが。

といつても「フィリピン人」の私とその問題点をあれこれ云うわけにはいかないし、同席者もその点をとやかく云うつもりはなさそうだ。

そんなところへ、白人の二人連れが入ってきた。坐った席が近かつたこともあり、リーダー格が二人に話しかけたところ一人はオーストリー、もう一人はイタリヤ人だという。それなのに我々が「江戸っ子」はオーストリア人だと思つたらしく、トンチンカンなことを云い出した。すぐ気付くだらうと思つたが、三人は誰もこの誤りに気付かないので私が口をはさんで、「オーストリアではなく、オーストリー」であることを伝えた。

「えっ？ オーストリアではないんですか？」と三人共にびっくりしていたのにはこっちの方が啞然。こんな調子ではオーストリーがどこにあるのかも判つてはいないのではないかと思つたが、それ

「もし患者さんが待つていたらな。でも今日は誰もいないと思うから坊さん達とダベルことになるだろう」

「その寺には何人も坊さんが居るのかい？」
「年寄りのが二人、中年のが二人、青年僧が三人といったところかな。もっとも幾人かは別のところへ行つたりするから、常にその全員がいるというわけではないけどね」

「そこに安く泊めてもらえるかな？」
「もし部屋が空いていたらね。でも今空いているかどうかは知らんな。坊さん達は仮に空いていても自らの専用の部屋に他人が泊るのを許さんしね……」

「成程、君は一泊いくら出してるかね？」
「私は、お金払ってないよ」
「えっ!？」

「というの、鍼治療やつてるから。例えば午前中にも老僧の一人の治療をやつたんだよ」

「ふん、治療費はどれくらいとってるの？」
「治療費はとってない。ルンビニでも全くのボランティア。といつてもそれで宿泊費、食費を払ってないから……」
そんなこんなで、私達の会話はなんとなく尻切れトンボに終わった。というのが私の印象である。

実は私が本題にしたいのは「江戸っ子」に関することなのだが、それについてはちと廻り道を許してもらいたい。

私が生れ育つたのは、富山県下新川郡小摺戸村若栗新455である。明治の大合併までは若栗新は一つの村（小さな村）だったらしい。すぐ隣の小村の赤岩村と共に「大野」とも呼ばれていたのだが、他の人々にとって大野とはつまり若栗新のことと考えられていた。実

際この地区内で建前や屋根の葺き替え（多くの家は茅葺きだった）などのことがあると、お互いの家々から一人ずつ出し合って「結」（扶け合い）がなされた。どういう理由があったかは不明だが、その赤岩地区は後に小摺戸地区に吸収されてしまった。しかし大野における「結」制度はその後に残っていた。

他方、私が産まれた時の小摺戸村は、私が子供の時の昭和の大合併で入善町の一部となった。その直後のことだったと思うが、名前だけは町の一部となったが、むしろ色んな面で不便になった。なにしろ、これまでは野良着のまま（村）役場まで行って（注・我家は村役場及び小学校まで直線で三百mしか離れておらず、地区の人々も野良着で気軽に役場へ出かけていったという）、相談すればたいがいのことはなんとかなった。役場の人々とも顔見知りが多かった。しかし、町役場というと片道で一里（実際には6kmあった）、そこへ行こうとすれば野良着ではなくちつとはマシな服装が必要だったし、なにしろ少なくとも半日仕事となる。へたをすれば、あっちこちとタライ回しをされて「また明日来い」なんてことにもなりかねない。「まったく合併で便利になるどころか、ややこしくなったことの方が多い」という言葉が交わされていたのを私は記憶している。又、旧小摺戸村にはバスの路線がなく（勿論、汽車、電車とも無縁）一部の地区ではそれなりにバス停まで行けたが、我家の周囲はそうした便とは無縁だったし、そもそも旧村には自動車を所有している家はゼロ、唯一の自動車はオンボロの消防車だけだった。ずっと後に校長先生が冗談半分に、「かつては町へ行くとなると尻端折りをして一里の道を歩いたものだ」と云っていた。

敗戦直後の学制改革では東隣りの新屋村との共立で黒東中学を形成した。どうも黒部扇状地の要部分に在ることから黒部中学と名乗る組みこまれたけど、住民には不便さが負わされるということが少なからず生じているであろう。その一例が、昨年（2016年）大火があった糸魚川市である。確か二つあった病院が規定に合わないと廃止に追い込まれ、同市は無病院となった。もし大病や大けがが発生すれば、救急車をとばして隣県黒部の市民病院へと運ぶしかない。気象条件が良ければハイウェイを用いればそれほど問題はない。しかし悪天候だったら黒部までの距離は決して机上の想定のようにはいかないし、へたしたら救急車自体が事故を起こすことだってありうるのだが、そういう風な最悪事態の想定はなされていないであろう。

よく冗談に、「月夜の晩ばかりじゃないぞー」とか「銃弾は前方から飛んでくるとは限らないぞー」と云ったりするが、そうした想定はなくとも大きいことは良いことだ的な発想法がはびこっているように思えてならない。

さて話がとんだ方向へと行ってしまったが、例のカトマンズで唾然とさせられた「江戸っ子」とそっくりのことが旧JRA内で横行していた。

堺市の出身だという男に対して「ああ泉州堺ね」と云ったところその男は「堺は自治都市であってこの国にも属していなかった！」と云い出した。つまり堺は堺であって、泉州（和泉の国）にも河内にもどこにも属していないのだのである。「へえ、講談でも『泉州堺』と云うように堺は和泉の国の一部じゃないのかね？」と私があざ笑いをこめて云ったところ、「なんだって〇〇は講談話を信用しているのかい？堺は自治都市だという同志の云うことを講談の言説をもって否定するなんて、その方がおかしいんじゃないの!？」といった具合に私への批判、その男への援護射撃を旧JRAメンバー（複

りたかったらしいが、黒部川をはさんだ地区が先に黒部中学と名乗ったので黒東にしたらしい。

当時黒部市はなく、旧くは三日市町その後は前沢村と合併して桜井町を名乗り、更には昭和の大合併時に生地町、若栗村、萩生村、踏掛村などが合併して下限の3万人を越えて黒部市となった。皮肉なことに黒部中学を名乗ったところは宇奈月町にあり、黒部市では桜井中学、桜井高校を名乗ったし今もその名称がそのまま残っている。一方の黒部中学の方は宇奈月中学としたらしい。

この合併時に乗り遅れた形になったのが、かつての宿場町である舟見町及びそこ共に中学を形成していた野中村だった。舟見という地名は現在は黒部市域にもあるが、そこは以前は愛本村の一部であり、かつ土地の人々も舟見町の一部と思われていたところだったため、私らが舟見という時この双方を意味してしまふ。他方、最終的にどちらにつくかが問われた時、舟見町は入善との合併を選んだのだが、野中村では意見が対立し下方（北方）の一部は朝日町へと加わることになった。

このため小学校自体が二分され、同時に舟見中学の一部からも別のところへと分離する者が出るといふ悲劇が生じた。

ついでに云うと、旧新屋村の河岸段丘のすぐ上に宇奈月町（の舟見）、入善町そして朝日町という三つの町域が出来るというややこしい構造がつけられた。多分、平成の大合併時にこうしたややこしいあり方も解消しようという狙いがあったと思われるが、宇奈月町が黒部市に併合されただけに終わってしまった。

大都市圏ならいざしらず三千m級の山の頂きまでもが市域に組みこまれ、他方では様々な行政、福祉施設などが分断され、地域住民の結合にも分断が持ち込まれるという状況では、名称だけ大都市に

数）がやり出した。歴史的考察なんかは正直云って呆れた。大体において、「自治都市」と云われたのはごく短い期間であるし、その市域はすぐ限られていた。歴史的にずっと自治都市堺があったわけではなく、確か南蛮貿易上そのような措置、特典が認可されたはずである。

和泉の国のごく一部に加えて、現在彼の住む堺市域はその市域が拡大されたところではない。江東区や新宿区、品川区、大田区、江戸川区等々が江戸の外であったという歴史的事実を抜きに、23区内にあれば全てが昔からの江戸であり、そこで生まれたならば江戸っ子と云いぐるめると同じであろう。ちなみに、かつての江戸の中に住んでいても三代そこに住んでこそ江戸っ子と云えるという説もあり、ただ江戸生まれであれば「江戸っ子」というタンカを切っていないわけではないとか。どうもそういうすごく原理的なことが判っていないみたいである。

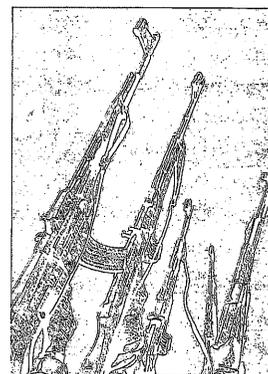
そういえば、すでに忘れられているかもしれないが、フーテンの寅さんが「手前生国と発しまするは、葛飾柴又、帝釈天で……」というタンカを切ったのを覚えている人も多かるう。

寅さんは決して江戸っ子とは云わなかったのは、葛飾は江戸の外にあったことを十分に知っていたからである。少なくとも映画製作者達は、もし寅さんに「江戸っ子」だとタンカを切らせたら、それは更にマンガにしかならないであろう。いくらフーテンの寅がマンガ的存在だったとしても……。

全然話が違うが、ネパールでは日本という山岳地帯は全て丘陵地帯となる。あの国では万年雪がある地帯約5700m以上でないと、山岳とは呼ばないからでその中間、日本などでは山岳（mountain）

と云うところは全て丘陵地帯になるからである。だから〇〇市から15 Kmのところと云っても自動車道があるわけでもなく、トレッキング・ロードしかないところだと、一日または二日歩いて行くことになる。それは土地の人々のスピードであって、多くの日本人の場合はその倍くらいの日程が必要になるそうである。なんだ15 kmなら車ですぐじゃないか……などと考えるはいけないのだよ。

言葉とはいろいろと面白い！



城崎さんへの手紙、また本の差入などは次の住所へお願いします。

〒183 - 8523 府中市晴見町4 - 10 城崎 勉

カンパは、本人へ または

郵便振替口座 00120 - 5-554301 城崎勉さんを救援する会
へお願い致します。

目次

U.S.のムシヨ	城崎 勉	2
寄稿	久積 育郎	10
城崎さんへのお便り	川上 貞	12
優しさを鎧で隠した革命戦士・城崎勉	足立 正生	14
城崎通信	浴田 由紀子	19
旧交を温めるということーソフト内ゲバ克服のために	大越 輝雄	21
城崎さんの笑顔の向こう側に見えるもの	西垣内 江春	23
江戸っ子	城崎 勉	26

城崎勉さんを救援する会

2020. 2. 26 発行

東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 03 (3591) 1301

頒価 300 円